

月の紅葉』と『卯月の潤色』との間にも見られる事で、從來のやうに僅かに二ヶ月の隔りを以て引續いて興行されたものと見て居たのでは、『潤色』の作意や、當込の語句は全く死んで了ふであらう。これに似たことは『待夜の小室節』の興作踊のクドキと『重井筒』との間にもいへることであらう。

〔編者註〕 以下近松の作品の年代的概観は前記『近松門左衛門』を参照されたし。

三 作品の題材

近松の作品百四十餘篇について、その題材上の概観を試みようと思ふが、これを場所・時代及び詩材に分ち、詩材は更に時代物と世話物とに區別して順次考察する事とする。

(1) 場所

先づ近松の作中に取扱はれたる場所について見るに、日本に於ては西は博多から長崎（博多小女郎）はいふ迄もなく、鹿兒島（薩摩歌）から更に鬼界島（平家女護島第二段鬼界島の場）より臺灣（國性爺後日戰）にまで及び、東は奥州（十二段、門出八島、凱陣八島、賴朝七騎落、吉野忠信）から

遠く蝦夷の千島（賢女手習、義經將葉經）に及び、北海の佐渡は『本朝用文章』や『用明天皇職人鑑』では重要な舞臺となつて居る。斯くの如く日本の果から果までに及んでゐるのみでなく、更に海を越えて、朝鮮（善光寺御堂供養、本朝三國志）から支那（以呂波物語、國性爺、國性爺後日、



丁初「戦合爺性國」

國性爺唐船）及び印度（釋迦如來誕生會）にも延びて居り、殊に『國性爺合戦』又は『後日合戦』などには馬來からシヤム、ペルシヤ方面の地名までも、その當時としては殆んど知り得る限りは網羅されて居るかの觀がある（『近松語彙』附）。
（錄地名部參照）

この廣汎な範圍の中で、最も重要な場所となつてゐるのは京都と大阪とである。京都を大切な場所として人物を活動させた作は、時代物殊に王代物に多く、大阪を中心としたのは世話物に多い。今、近松の世話物廿四篇について見るに、その中の十六篇までは實に大阪の出來事であつて、而も遊里に深い關係を有するものが十篇の多きに及んで居る。そのうち堂島

新地、又は曾根崎新地即ち北の新地の遊女と關係して心中する作が『曾根崎心中』、『心中二枚繪草紙』、『心中又は水の朔日』、『心中天の網島』の四篇（『油地獄』の與兵衛は曾根崎新地の天王寺屋の小菊）であり、島の内六軒町の遊女に關係するのが『心中重井筒』、伏見坂町（道頓堀の芝居裏手、元祿十一年新地となる）の遊女と馴染んで心中するのが『生玉心中』で、他の四篇（淀鯉、夕霧、壽の門松、梅川）はすべて新町である。而して當時遊里としては大阪の第一位にあつた新町の遊女に關係した作は、いづれもその作中の男主人公が遊女に惑溺して破滅の淵へ沈んだ場合でも、心中に終らずにすむ仕組になつて居る。然るに、新地殊に北の新地の遊女に關するものに心中が多いのは、單に『曾根崎心中』の影響とのみ見るべきであらうか、寧ろ新町と新地との遊女氣質の相違、嫖客と遊女との身の上の相違、引いてはこれを材題とする近松の心中物に關する作意の上にもその原因その理由を求むべきではあるまいか。

更に近松の作に扱はれた遊里を通覽するに、大阪以外では、世話物としては京の石垣町（女腹切）、奈良の木辻（淀鯉）及び博多の柳町（博多小女郎）が出るだけであるが、時代物や歌舞伎の脚本の中へは、京の島原（反魂香、吉野忠信、傾城島原蛙合戦）を始めとして、堺の乳守（傾城阿波鳴渡）、越前の三國（傾成佛の原）、神崎（加古教信七墓巡）、有馬（水木辰之助餞振舞）、室（佛母摩

耶山開帳)、靱(壬生大念佛)、江州鏡山(酒吞童子)、大阪の三軒屋(吉岡染)等の如き場末の遊里までが大切な場所として扱はれ、大磯化粧坂に至つては曾我兄弟を始めとして鎌倉武士の盛んに活動する舞臺となつて居る。尤もこれは無論當時さまで榮えた遊里でないが、作品の世界の上から來たことであるのはいふ迄もない。斯様な次第故、近松の作品から遊里を除去するとすれば、場所の上に於ては、その大切な場面を殆んど失ふことになると言つて差支なからうと思ふ。正にこれ遊里生活即ち新らしき社會生活の代表であつたかの如き、元祿時代の生んだその時代的文學の一特色を示して居ると謂つて差支ないであらう。この點に於て、西鶴の好色物やその他の浮世草紙のみが遊里文學ではなくして、近松の作品も亦場所に即して見れば決してこれ等に劣らぬ遊里文學であるといへるであらう。これやがて時代的色彩を持つ文學といふべき一特色である。

また遊里以外の場所について點檢するに、京都・大阪に次いで五畿内殊に堺・奈良・宇治・吉野・近江・播磨などが相應に用ゐられ、そのほか丹波・丹後・紀伊・中國・四國・甲斐・信濃・上野・下野等各地一々枚舉に遑がないし、又その必要もないであらうが、殊に鎌倉は非常に多く、ここを背景とした作は三十篇近くに及んでゐる。之は彼の作品に曾我物・判官物乃

至北條時代のものなどの多いが爲の當然のことで、格別時代的色彩が出て居るとはいへない。然るに注目すべきは、江戸を中心とした作の一篇もない事である。近松の作に見える江戸はあの『心中江戸三界』の俗謡にうたはれた「山も見えざるかりそめに江戸三界へ往かんしていつ戻らんす事ぢややら殺して置いて行かんせの」といふやうな情趣と一脈相通ずるやうな、遠い場所として扱はれて居るやうに思はれる、あの『丹波興作』のしらべの姫の江戸下りの場面や、『壽の門松』の興兵衛の江戸下りなど、いづれも今日の海外渡航にも勝つた隔離の情が出て居るやうにさへ感じられる。近松の作としては多少江戸に縁のあるのは件の二篇の外、『傾城吉岡染』ぐらゐのものである。時代物としては江戸に場所を取ることは當時の幕府の忌憚に觸れる虞れがあつたので、多少の當込の作でも鎌倉に假托した（基盤太平記、相模入道千足犬）程であるが、世話物ならばこれを取れば取れない事はなかつたらう。既に西鶴の『五人女』にさへ作られた八百屋お七の如きは、絶好の詩材であつたに拘らず、遂に江戸を背景とするものには筆を染めずに終つた。また近松は江戸ッ兒辯を使ふことは長崎辯などを使ひこなしに程に手際よくはない。『雪女五枚羽子板』第一段赤松幸満館の厄拂の際の、江戸の厄拂の關東ベイの使ひ方や、（註）『傾城吉岡染』の中巻で、吉岡が三軒屋の遊廓へ二度の身賣をして、遣手に江戸前のタンカを

(註二) 切る條などを見ても、齒切れの悪いこと夥しい。どうも近松は本當の江戸ッ兒辯や吉原の遊女言葉は知らなかつた、少くとも十分には遣ひこなせなかつたやうに思はれる。西鶴の方が遙に江戸通である。蓋し近松は一度も江戸へは來なかつたらしい。かういふやうに場所の上から見ても、近松の作は京阪、殊にその世話物は大阪を中心とした一種の郷土藝術的色彩を帶びて居るともいへる。

〔註一〕 さてまた東^{アツ}の果にては斯くこそ厄を拂ひけれ。詞お厄拂ひ／＼厄つ拂ひ申すべい。がいに出度い此方の御壽命語るべいなり。鶴と龜めが何うち食つてすつ百萬年のめり／＼とくたばり外れにあやかりなされ。父^{チヤ}ら母^カらにぢやばゝ息災。女兒^{メナ}小倅 生みのまゝなる餓鬼十二疋。錢金俵や小袖の中から。目玉むき出し耳たぽでつかく。五百八十七曲り惡魔外道ぶつ拂つて。西の海へ地^チふんなげろ。フシこつきやつこうと祝ふとかや。(雪女五枚羽子板 第一)

〔註二〕 ナマリはささ長々しいごたくを述べるな聞きたく無いぞ。なまぬるつこい上方の女郎を。廻した格をつん出したら當が違ひ申すべい。この吉岡がすがりの花なればこそ主達に身をブン任する。客と寝べいなら何の僅かな銀見度くない。親方殿も聞きなされびやく／＼客はしないさ。お江戸の傾城は水道の水を飲んで骨が硬い。主がやうな切先の錆びた錆やり手に廻さるゝこんぢやないぞ。ま一度言つたらおつかない目に逢はす。そこつつ走つてなくなれ地なれとフシ言ひければ地江戸詞にきめられて流石の遺手も二言と出ず。(傾城吉岡染、中巻)

(2) 時代

第二に近松が作中に取扱つた時代は如何といふに、これ亦場所の廣汎なものと相並んで古今を貫き、遠く神代から、近松自身の目前の事件にまで及んで居る。今その大體を表示すれば左の如くである。

(一) 神代 ○日本振袖始 (素盞鳴尊の御活躍)

(二) 平安時代 (大時代)

○日本武尊吾妻鏡——〔日本武尊の御武略、大碓命の惡逆〕

○浦島年代記 (安康・雄略天皇時代)——〔浦島太郎の活動と圓大臣の惡逆〕

○用明天皇職人鑑 (敏達天皇時代)——〔花人親王と玉世姫の御事、ますら外道の惡逆〕

○聖德太子繪傳記 (推古天皇時代)——〔聖德太子の御活動と守屋の惡逆〕

○善光寺御堂供養 (推古天皇頃)——〔善光寺如來の緣起、本田善光、彌生前の事。矢田藤平の惡逆〕

○大織冠 (齋明天皇時代)——〔珠取海士の傳説、鎌足、萬戶將軍の活動と入鹿の反逆〕

○天智天皇 (齋明天皇時代)——〔葛城大君と花照姫の御事等〕

- 持統天皇歌軍法（持統天皇時代）——〔花人親王と長歌姫の御事、春彥命の叛逆〕
- 賢女手習並新曆（持統天皇時代）——〔菊池道清二子の復讐、白鳳曆制定〕
- 百合若大臣野守鏡（平城天皇時代）
- 以呂波物語（嵯峨天皇時代）——〔弘法大師の活躍、光照いろはの前の情事〕
- 嵯峨天皇甘露雨（嵯峨天皇時代）——〔弘法大師と守敏僧都との法力争ひ〕
- 融大 臣（嵯峨天皇時代）——〔融大臣とうてな姫の情事〕
- 松風村雨束帶鑑（文徳天皇時代）
- 井筒業平河内通（清和天皇時代）
- 蟬 丸（醍醐天皇時代）
- 天 神 記（醍醐天皇時代）
- 日本西王母（村上天皇時代）
- 花山院后諍（花山天皇時代）
- 弘徽殿鶺鴒羽產家（花山天皇時代）
- 赤染衛門榮花物語（一條天皇時代）

(三) 源平時代

○傾城懸物揃(將門)

○梔狩劍本地(惟茂)

▲賴光四天王中心

○多田院開帳

○文武五人男

○忠臣身替物語

○嫗山姥

○酒吞童子枕言葉

○傾城酒吞童子

○關八州繫馬

○鎌田兵衛名所盃 (平治合戰)

○瀧口横笛

○娥歌加留多 (平家時代)

○源三位賴政（一名、扇の芝）

○賴朝伊豆日記

○賴朝七騎落（改題、源氏移徙悅）

○出世景清

○薩摩守忠度（平家の遺臣）

○盛久

○戀塚物語（文覺）

○一心五戒魂

○大原問答

○念佛往生記（熊谷）

▲義經中心（判官物）

○門出八島（改題、津戸三郎）

○凱陣八島

○源氏烏帽子折

○十 二 段

○孕 常 盤

○源氏 冷泉節

○殢ふたりしづか靜胎內裙

○吉野 忠 信

○源義經將基經

○御曹司初寅詣

○平家女護島

○佐々木先陣 (改題、佐々木大鑑)

(四) 鎌倉時代

○傾城島原蛙合戰 (秀衡の遺臣、天草四郎、島原の亂)

▲曾 我 の 復 讐 (曾我物)

○世 繼 曾 我

○曾我七以呂波 (改題、義經追善女舞)

○團扇曾我だんせん（改題、百日曾我）

○根元曾我

○曾我五人兄弟

○大磯虎稚物語

○本領曾我

○加増曾我

○曾我虎が磨いしうす

○曾我會稽山

○柏崎

○最明寺殿百人上臈（時賴、時宗）

○日蓮上人記

（五）吉野朝時代

▲太平記物

○相模入道千匹犬（北條高時—綱吉）

○本朝用文章（日野資朝と阿新丸）

○つれづれ草（兼好法師）

○兼好法師物見車

○碁盤太平記（忠臣藏）

○吉野都女楠（身代新田、楠正行）

○大覺大僧正御傳記（日像の弟子大覺、兒島高德夫婦）

（六）東山時代

○東山殿子日遊

○藍染川（後小松天皇時代の應永年間）

○雪女五枚羽子板（赤松滿祐の謀叛）

○當流小栗判官

○今川了俊（了俊が青砥藤綱の子を拔擢すること
になつてゐるのは、時代無視である）

○傾城反魂香

○津國女夫池（足利義輝）

○雙生隅田川

○信州川中島合戰

(七) 太閤時代

○傾城吉岡染 (石川五右衛門、吉岡憲法)

○本朝三國志 (秀吉)

(八) 現代物 (世話物)

二十四篇のうち、巷説六、當時の事件脚色十八篇。

(九) 外國物

○國性爺合戰

○國性爺後日合戰

○唐船噺今國性爺

○釋迦如來誕生會

(十) 時代不明

○賀古教信七墓廻

○下關猫摩達

○三世相

これによつて見れば、我が國の歴史・傳説・巷談等のあらゆる時代、あらゆる方面に互つてその材題を求めて之を使用してゐることが分る。只少し寂寞を感じるのは『中將姫』『愛護若』『田村將軍』『賴政』『義仲』などいふやうな、戯曲としてよく用ゐられる人物を材題としての作の見えないことである。併し若し『田村將軍初觀音』『賴政扇芝』や『信濃源氏木曾物語』『巴太鼓』が近松の作であるといふ推定が成立すれば、この缺陷を頗る補ふ事になるのである。以上の表を見るに平安時代物中で、殊に最も上代に屬する平安以前の作、即ち『日本武尊吾妻鏡』から『持統天皇歌軍法』に至るまでの八篇のうち、『聖德太子繪傳記』と『善光寺御堂供養』との二篇は佛教と外道との葛藤を主眼としたものであるが、この外はすべて、悪者の惡逆無道の爲に上が流離の苦を嘗め給ふを骨子とした所謂反逆物である。大時代の材題を選んでこれに劇的葛藤を興へる條件として近松が反逆といふ事柄を扱つたのは、歌舞伎の脚本にお家騷動物が多く、また武家時代物の淨瑠璃に謀叛物の多いのと相對して注目すべき事である。それが平安時代のものとなれば、戀愛本位のものが大部分を占めて居る。ここにも亦元祿時代とい

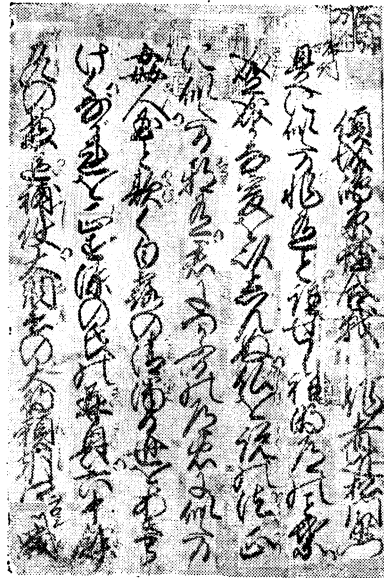
ふ舊道德・舊習慣・舊階級の破壊されて町人といふ新階級の勃興した時代精神が、自づと反映されて居ると見れば見られないことはない。

それから源平の武將を材料とした物のうち、頼光四天王を中心とするものが七篇ある事も頗る注目すべきで、是等の人物が當時の一般人民に取つては殆んど神に近い國民的英雄であり、また勇士であり、當時の武士道的精神の標準から見れば理想の人物であつたことが、翁の詩材となつた一つの原因であるには相違ないが、また一方に於ては、井上播磨の流を引いて金平式の人物を語り生かす事が得意だつた義太夫の藝に對しては、四天王などは頗る適當な材題であつたに相違ない。

尙又、義經主従を材料とする判官物が十一篇、曾我兄弟を取扱つた曾我物が十篇といふ多數に上つてゐるのも見遁してはならぬ。既に判官最良といふ言葉さへあり、謡曲に、『義經記』にまた古淨瑠璃に澤山仕組まれて、最も國民的に追慕された義經主従、及び敵討の模範として兒童走卒も知らない者の無い曾我兄弟は、實に民衆的詩人たる立場にあつた近松としては絶好の詩材であつたのは言ふまでもない。

斯の如く過去の國民的英雄・豪傑・佳人・孝子を材料とすると同時に、又この大詩人は時

を昔に假りつつ、その當代の顯著なる事件をその作中に仕組んで觀客の喝采を博するといふ老巧の手段を取つたものが尠くない。例へば室町時代に世界を假托した『碁盤太平記』に赤穂義士の復讐を仕組んだのや、また鎌倉時代の出來事とした『相模入道千匹犬』に犬公方綱吉の弊



丁 初「戦合蛙原嶋城傾」

政と、これを改革した新井白石の事柄を假託したのや、頼朝時代の奥州の秀衡の殘黨の事件と見せつつ實は天草騷動を仕組んだ『傾城島原蛙合戦』の如きはその顯著なものである。惟ふに時代物中には、是等の作の外にも、尙澤山に當代の政治上の諷刺や、樂屋落ちの類があつて、當代の心ある觀客に取つては、ハ、アと首肯せしめたやうな假託は相應にあつたものであらうと思はれる。ただ今日に於ては、まだそこまで立入つて研究して居ないのは残念である。その他開帳・遠忌などの當込も行はれたことは當時の流行で、必ずしも近松に限つたことでもなかつた。

更に進んで近松の作品を内容的に檢覈するに、この時代區分といふものは實は名目上のことに過ぎずして、明治年間の團十郎式の活歴の眼を以て見れば、既に述べた如く近松の時代物は、世界に即して見れば、一見これを區別し得るが、少しその内容に立入つて觀察すればその中には全くの時代錯誤、痴人夢を説く底の分子が混入されて居る。しかもそれは近松の後期の作になればなる程甚しい。例へば天智天皇時代の武士が悪者の無道を罵つて「我と刺違へ心中して繪双紙にのるきざし」といつたり（天智天皇、後藤左衛門が女房と二人で虫賣となつて出たり（當流小栗判官）、墨の衣に投頭巾、眞紅の紐で鳧鐘を胸にかけて、「是は扱置き對王殿や安壽姬」と日暮林清の歌念佛を唄つて歩く業平もあるし（井筒業平河内通）、用明天皇時代に鹿島事觸が廻國したり、持統天皇時代の京勤番の郡主が鷹の羽や蜻蛉印の立鍵の行列でやつて來て、剃下げ奴の置く青皮の覆ひの挾箱に腰をかけて密談したり（持統天皇歌軍法）、大織冠鎌足時代に「唐人の行列／＼」と一冊三錢づつで讀賣をしてゐる男を見付けて「なう介様かいのと轉び出て、編笠押除け首筋に抱ついてわつと泣く」十二一重の傾城が現れたり（大織冠）、四天王時代に「三味線鼓弓文作野良の一卷の諸藝何でも出來て」煙艸賣とまで成下つた武士で、その名は煙草屋源七といふ、當時瓢箪町に隠れなき匂ひ入りの煙草屋と同名であつたり（姫山姥）、貸編笠に人

目を忍ぶ義經が、京九條の遊里の柏屋で、若紫といふ遊女を揚げて居續けをする、その若紫は「小枕なしの高島田、後れを憎みて抜き揃へ、二尺五寸の袖の下腰の廻りに綿入れず、裾廣がりに棲高く、中入れなしの中幅帶、衣裳は當風三つ重ね、道中は繰出しの浮き歩み」をするのである（吉野忠信）。さうかと思ふと、菅公時代に「長崎から唐人流の料理人を呼寄せ、鶏飯羊粥、^{ゐのこ}豕の焼皮、熊の^{たなごころ}掌」の料理をこしらへ、ちんだ・泡盛・覆盆酒などを酌んで唐使を御馳走させたりするのである。時代錯誤も亦甚しいものではないか。併し一步退いて考へて見れば、これ實に全く元祿時代の活寫たることが容易に認められる。故に結局作者は、表面上詩材を廣く求め、時に於ては古今を空しうしつつも、その内容に於ては全然元祿時代を背景としたといふことになる。元祿時代の風俗を寫し、元祿時代の流行物を描いてゐるのである。それ故近松の世話物は勿論であるが、時代物に於てさへも「時代」は決して本質的・絶對的のものではなくて、ただ便宜のものです、要するに、元祿時代の活社會、殊に武士を中心とした社會——而もその武士も元祿時代といふ特殊の時代風潮の洗禮を受けた武家社會といふものが、全體を貫く基調をなしてゐるのである。

斯く時に於て時代を分ちつつも時代を無視して、凡てを元祿時代といふ大鎔鑪の中に入れ

て、鑄直したこの大工匠は、更にその時代の中に働く人物を扱ふ上に於ても亦、この巨腕を遺憾なく發揮してゐる。今引續いてこの點について少し詳しく述べよう。

抑も近松の作中でも引締つた世話物に於ては、その中へ表れる人物は極めて少い。大抵は作の主人公（女の場合も少くない）、その相手となる副主人公（主人公に關係する男女）及び劇的波瀾葛藤を起すべき一素因をなすべき人物、即ち敵役、及びその他二三の人物、大抵は老役、悲劇の犠牲となる献身的な女性等五人内外の主要人物で足りるのである。ところが時代物では、どうしても十人位の人物が必ず出てゐる（武將、御臺、若君、戀人、家老、妻女、乳人、乳人子、悪臣三人、悪臣の子―悲劇的の犠牲者）。この十人位は主要な人物で、その外にどうしても十人以上の人物が出ない作は稀であるから、自然近松の作全體を通計したならば、その人物の數は非常の多數に上るであらう。併し乍ら是等の幾百千の多くの人物は、その時代物だけについて見れば、決してその幾百千の數だけのそれぞれの個性を具へて活きて働いてゐるのではなく、極めて少數の型に簇つた類型の人物として働かされて居るのである。例へば『日本西王母』の中に出る薄雲といふ希代の醜婦は、徹頭徹尾佳人才子の怨敵として實に絶大の醜惡を表現するのであるが、實はこれは曠野鬼といふ外道の化現であるといふことになつてゐるのは、彼の『釋迦如來誕生

會」中の釋迦に對する提婆、『善光寺御堂供養』に於ける本田善光に對する矢田藤平と同型の人物であるが、これは『用明天皇職人鑑』の敵役である山彦は惡逆至らざるはなく、外道を以て國を紊さうと企てるのであるが、その正體は提婆の化現であるといふが如き、又は『大織冠』の作中に於て、暴戾の限りを盡す入鹿は實は天竺では阿闍世王、唐土では殷の紂王として生れた外道であるといふなどと全く同型のものではないか。否なそれのみではなく、其の他の反逆物・謀叛物に於ける敵役は、場合によつて、或は堅いか碎けたか、或は惡を眞甲に振翳すか、又は之を表面に示さずして陰險の術策を弄するか^ノの別はあるとしても、その人物の本質に於ては要するに同型であり、同じ人形、又は似寄りの型の人形を聯想せざるを得ない程度のものであつて、決して個性を有する血の通つて居る人間としては見られない。而してこれは決して極惡の類型の人物にのみ限るに非ずして、他の明智神の如きもの、武勇古今を空しうするもの、忠勇鬼神を泣かしむるもの皆いづれも然りで、彼の歌舞伎に見る立役・敵役・道外方・親仁方（老役）・花車方・若衆方・若女方・子役等の類型を聯想させるそれぞれの役柄の人物が、それぞれ出てゐるのであるが、それが、矢張り歌舞伎劇同様、どの作に於ても、名は異り、境遇は多少變つて居るとしても、一步突込んでその本體を捉へようとして見れば朦朧として捕捉し難

く、皆同じものに過ぎないことになる。即ち概念の人形化に過ぎないのである。例へば常磐母子を見通す宗清も（源氏烏帽子折）、子に太刀を盗ませる秀景も（百合若大臣）、我が子の首實験をする小山田高家（吉野郡女楠）も、皆類似の人物であり、有王（平家女護島）も、藤九郎盛長（頼朝伊豆日記）も、鎮西八郎（鎌田兵衛名所盃）も、池の庄司（當流小栗判官）も、般若五郎（河内通）も、曾我の五郎も、車匿童子（釋迦如來誕生會）も、いづれも前髪立の大若衆で力飽く迄強く、義に勇む勇士たる佛は、『百合若大臣野守鏡』に出る彼の四十八挺櫓の小船を一人で引戻す府内の市郎丸と同型で、いづれも金平の亞流であつて、朝比奈や和藤内と大差ない人物である。その他皆然りで、一々例を擧げて比較するの繁に堪へない。

而して近松はまたこの幾百千の人物に、すべて元祿の衣裝を着せ、元祿の言葉を使はせたのである。「コレ世間の娘に問うて見や、十六七になつてから、嫁入を急ぐか急がぬか、せかぬ娘があつたらば二つともない首がけ」と結婚を仲人に迫る中納言高房の女三の君（酒吞童子枕言葉）を始めとして、頼朝に戀を挑む政子（頼朝伊豆日記）や、小栗判官に濡れかかる照天姫（當流小栗判官）は、いづれも西鶴の『五人女』のお夏やお七と變らない程の勇敢なお姫様である。また耶輸陀羅女が悉達太子の薄情を恨む言葉は、遊女の口説と變りはなく、それに油をかける官女

斯の如く近松の戯曲はその作の世界に立脚して研究して見ると、時代物は

[illegible]

二八一

らくりの助けと音楽の力とによる人形劇に對しては當らないと思ふ。現實を離れた夢幻漂渺の世界を描き出したのが、即ち人形劇作者としての近松の偉大なるところで、やがてまた我が人形劇の生命はここにある。人形劇が歌舞伎劇と同様の立場に立たうとする時は即ち人形劇の自殺の秋である。彼の虚實皮膜の間を行くやうな人物を現すに、あの何ともいへぬ味のある人形を以てし、そこに道行・景事・物揃などいふ夢の如き幻の如き、さながら月夜の美觀にでも比すべき漂渺たる詩界が、義太夫の音楽の流れるがまにまに展開されて行くのが人形劇獨特の詩壇である。ここに東洋趣味の一特質たる超人世の世界、夢の如き詩の世界、義理を超越した自由の人情の彼岸が展開されるのである。歌舞伎の脚本を作つては當時の寫實派の大本山であつた坂田藤十郎を自由に舞臺に働かした程の近松が、何で不用意に淨瑠璃に於てのみ夢幻的の詩界を展開する事であらうぞ、全く歌舞伎劇と人形劇とはその本領を異にすべきものとの自覺的態度からであらう。虚實皮膜の間を行つて慰にすべきものとの藝術觀を有したこの大詩人は、階級制度に囚はれ、海外渡航を禁止されつつ、一方に於ては富力を擁して肉の世界に突進する無智奔放なる元祿町人をして、せめて藝術の世界に於てだけでも自由の天地に翔らせようとの温かい深い用意に出たものであらう。これは獨り時代物のみでなく、世話物殊に心中物に於て

未來の靈の絶對自由の世界を示してゐるのも亦、この藝術觀に立脚したものと解すべきであらう。故に余は、近松の淨瑠璃の時代物の價值は、その夢幻の世界、虚實皮膜の間を行く慰の爲の詩界にあるのだと斷じようと思ふ。

(3) 詩 材

以上近松の作品の世界とその人物とについて大要を述べたが、これから進んでその詩材の原據及びその詩材を如何に劇化したかについて一通り觀察して見度いと思ふ。

(イ) 時代物の詩材

既に前に述べた如く、近松はその時代物中に我が國古來のあらゆる史譚・傳説等を取入れて居るのであるが、その中には原據の明かなものとまだ明かでないものがあり、又その明かなものと雖も、決して、それをそのまま取入れるといふことはなく、一度自己の詩囊に貯へ、自己の主觀を濾過した上で、作品中に適宜按配するといふ手段を取つたものが十中の八九を占めて居る。即ち巧妙に換骨脱胎してゐるから、容易にその原據をつきとめ得ない。尤も作品の原據を知る事は、それだけでは決してその作の本質的價值を定める上には重要な事柄ではないの

であるが、史的觀察點に立つて之を見る場合には、國民的の傳説・史譚または過去の代表的の藝術的作品を、如何に取扱つたか、而してかくして作られた作品が、又どれだけの史的價值を有するか、また國民性の持續發展の上に如何に役立つたかを知る上に於ては、頗る重要な基礎的研究題目となるのである。今その主要なものを少し指摘して見ようと思ふ。

先づ王代物に就てであるが、之はまだよく明らかでない。恐らくは記紀のやうな古典にも相應によつたものと思ふが、『前々太平記』や『前太平記』のやうな俗書に傳へられてゐるやうな傳説・説話・史譚、又は歌物語（百人一首指南抄、撰集抄、伊勢物語）、緣起物（善光寺緣起、聖德太子繪傳、北野天神緣起）などに直接間接によつたらしく思はれるものもあるが、それはこの場合さまで必要ではない。ここに注意すべきは、鎌倉以後の戰記物以下、謠曲・幸若・お伽草紙・説經・古淨瑠璃・歌舞伎劇など、主として文藝的作物と近松の作との關係である。

戰記物　ところで戰記物としては『保元物語』・『平治物語』は殆んど顧られなかつたやうであるが、『平家物語』を始めとして、『源平盛衰記』・『義經記』・『曾我物語』などは、いづれもその中の劇的要素を持つた部分は詩材として直接間接役立つて居る。併し是等の諸書に見えて居る詩材は、既に謠曲や幸若の判官物や曾我物の原據となつて、その作中に殆んど取り盡され

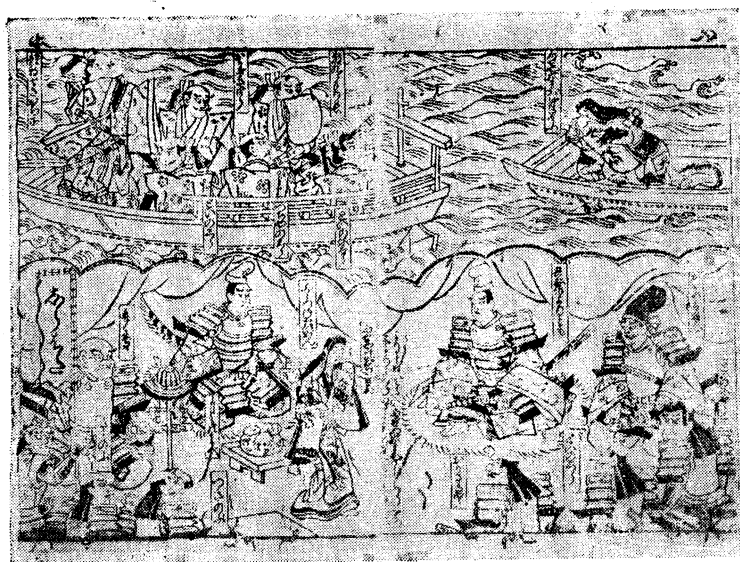
てゐるほどの模様である。随つて是等の作物を尊重した近松は、また自然それを利用しその結構を活用したものが多い。

併し乍ら戦記物中でも最も新しく、謠曲や幸若が行はれ出した年代と左程年代上の相違ない頃に作られたので、自然その中に取入れられる事が少なかつた『太平記』に對しては近松は直接詩材をこの中に求めて居る。例へば北條氏滅亡の場面を描いた『相模入道千匹犬』の如き、父の仇を討つた阿新丸を主人公とした『本朝用文章』の如き、又は身替り新田で名高い『吉野都女桶』の如き、或は高師直が鹽谷高貞の妻に懸想する事件を仕組んだ『兼好法師物見車』の如き皆さうである。『太平記』の或一節を挿話風に取扱つて相應の効果を收めたものには、『國性爺合戦』及『國性爺後日合戦』に於て、國性爺父子が兵法の奥義を『太平記』によつて悟る條とか、又は『大經師昔曆』の中卷に於て、以春の小間使玉の伯父赤松梅龍といふ太平記讀を糊口の資とする浪人が、辯舌は講釋、道理は太平記、形は安東入道が理窟をこねるもかくやあらん』と思はれる檢幕で助右衛門をぎやつといはせたり、又は『太平記』廿一卷にある侍從の戀の取持を引いての玉への訓戒など、いづれも手に入つたこなし方である。これについて思ひ出すのは、『心中宵庚申』の中卷のお千代の老父平右衛門が、『平家物語』の祇玉の條を讀んでお千

代を慰める條で、双方同工異曲である。思ふに『太平記』と『平家物語』とは、戦記物中では近松の愛讀書であつて、常に座右にあつたものであらう。時代物中殊に武勇物の武人の行動、戦争の模様などを寫す場面の文章の雄渾壯大・流麗雄偉にして、その格調その用語に於て、さながら『平家物語』乃至は『太平記』中の勝れたる文章を読むが如き感あるもの少からざるは、固より作者の天稟によるとはいへ、また如何に是等の書物の影響を受けて居るかを語るものではなからうか。尙、一言すべきは、元祿以後太平記讀が流行したといふことも亦『太平記』が近松の詩材として用ゐられた一つの原因であるといふ點である。

謠曲 更に進んで謠曲と近松との關係について見よう。此の點については、既に宇治加賀椽の事業を述べた場合に、謠曲と淨瑠璃との關係について一言して置いたが、今茲に更めて少し述べて置かう。抑も近松が彼の構想に於ても、脚色に於ても、文章に於ても、共に稚拙であつた古淨瑠璃の後を承けて立ちながら、淨瑠璃の價值を高め、戯曲としての人形劇を大成するに至つた功績は偉大なものであつて、その功績として數ふべき彼の事業は多々あるであらうが、その一つとして數ふべきは、過去の最大戯曲たる謠曲をその作中に自由自在に攝取して、その内容を豊富にした點であると思ふ。ところで近松が謠曲をその作中に取入れた跡を見るに、

その初期の作即ち『三社託宣』や『藍染川』や『柏崎』、『葵の上』などは同名の謠曲を粉本とし、その文章までもその作中の眼目の處に忠實に踏襲して居る。また『凱陣八島』にはその第二段に『安宅』、第三段に『攝待』の文を割合に忠實に取入れて居る。單にこれだけでは左まで價值あるものではなく、古淨瑠璃末期の面影を存したもので、謠曲文學の踏襲模倣に過ぎない。然るに、進んで近松が第二期に入り、義太夫の爲に執筆するやうになつてからは、次第に筆力が圓熟の域に進み、自己の力を自覺すると共に決して謠曲に驅使せらるゝことなく、寧ろ之を驅使し、利用し適用するやうになつた。その結果謠曲の筋立の翻案や、詞章の活用や、又は俗化、即ちもぢり地口といふことまでが盛んに行はれ、而もそれが年と共に極めて巧妙になつて來た。近松の作全體を通じては、謠曲文を引用して居る範圍は恐らくは謠曲百番以上からであらう。近松は淨瑠璃を作る場合でも、必要に應じては謠曲の文句は口を衝いて出たらうと思はれる程、巧妙に自由に使ひこなし居る箇所が少くない。かくして謠曲は近松化し、淨瑠璃化し、元祿化したのであるが、この點は世話物に至つて、愈々その靈腕を發揮してゐるやうに思ふ。今茲にその實例を一々擧げて説明して居る邊はないから、左にその材料を少し列擧して置く。宜しく原作について比較せられよ。



頼朝七騎落挿畫

先に擧げた『凱陣八島』のほか、『頼朝七騎落』には第三段に七騎落、『融大臣』の第五段に融を、『三社託宣』の第三段には放生川の文を、『つれづれ草』と『蟬丸』の第一段貴船詣の場には鐵輪の趣向を、『佐々木先陣』には藤戸と蘆刈を、『本朝用文章』の第五段には放下僧の構想の翻案と原文とを、『十二段』の第一に張良、第二に熊坂を、『義經追善女舞』の第一段妻戀猩々の段に猩々を、『扇の芝』の第三に頼政を、『日本西王母』は、西王母によつて構想した上、その第二段に景清の文句を働かせ、四段の反魂香のくだり揚貴妃を、『頼朝伊豆日記』に芭蕉の文を、『下關猫摩達』の第一段に景清と舟辨慶、五段に舞車、葵の上の文

章をそれぞれ活用させて人物を働かせ、『松風村雨束帶鑑』の第三に松風、『根元會我』の四に切兼會我、『源氏烏帽子折』に烏帽子折、『天智天皇』の第三に采女を取つてある。序にもう少し舉げれば、『蟬丸』の第三に蟬丸、『大磯虎稚物語』の第四に小袖會我、『梟狩劍本地』の第四に紅葉狩、『嬬山姥』の四に山姥、『酒吞童子枕言葉』の四に大江山、『天神記』の五に雷電、『平家女護島』の三に俊寛が、『雙生隅田川』の四に隅田川が、『關八州繫馬』の四に土蜘蛛が取入れられて居り、『最明寺殿百人上臈』の下に鉢の木、『用明天皇職人鑑』の第三に道成寺、『文武五人男』の第四と『癡靜胎内摺』の四と共に安宅が、いづれももちつて用ゐられて居る。その他詳しく穿鑿したらまだ澤山あるだらうが、これでその一斑は推測出來よう。

また能狂言を取つたものとしては『凱陣八島』の四に花子、『束帶鑑』の五に靱猿、『天鼓』の一にこんくわいを取つたのは誰も知ることだが、『義經將棊經』の第一段に笠の下の翻案があり、同じく二段、泉の妻道行に法師物狂の文を綴込んであるのなども面白い。

幸若・お伽草紙

次に幸若との關係はどうかといふに、これは謠曲とは比較にならない程稀薄である。よく『出世景清』が幸若の『景清』を粉本としたと言はれて居るが、私の見るところでは近松は直接幸若によつたものではなく、寛文十一年九月刊行の古浄瑠璃『景清』によつ

たものと思ふ。而してこの古淨瑠璃の景清は恐らくは幸若を元としたものであらう。同じ關係は『百合若大臣野守鏡』にも適用出来るやうに思ふ。成る程『百合若』の説話としては幸若は有名なものであるが、説經の『百合若』が行はれて居た上に既に井上播磨の物語に『百合若磨』があり、岡本文彌の正本に『百合若高麗攻』があり、また元祿十三年には大阪の竹島座で『今用百合若』を、京都の龜屋座で『百合若唐船』を興行して居るので、元祿時代は百合若ばかりであつたから、是等の刺戟影響の方が多いかも知れない。『大織冠』にしてもさうであつて、幸若によつたよりは、井上播磨の『大織冠』（元祿六年、京早雲座、白石彦兵衛）や、歌舞伎の『面向不背玉』（元祿六年、京早雲座、白石彦兵衛）によつたといふ方が適切であると思ふ。かういふ次第で、私は近松と幸若との關係は左程重くは見ることが出来ない。恐らくは徳川時代に於ては、後になればなる程、幸若は既に謠曲に壓倒せられて居たので、自然、淨瑠璃に對しても直接の影響は少かつたのであらう。お伽草紙や説經との關係も矢張りさうであつて、茲に取出して言ふ程のこともない。強ひていへば、お伽草紙に對しては、『瀧口横笛』が『横笛草紙』に、『傾城懸物揃』が『倭藤太物語』に、『雙生隅田川』が『隅田川物語』に關係があるといへば言へないこともないが、既に加賀椽の正本に『倭藤太』があり、山本角太夫に『隅田川』があり、また『當流小栗判官』は説經の『小栗判官』に關係

があるとはいふものの、既に古淨瑠璃にも『小栗判官』があるのだから、題材論としては寧ろ此の方面の關係を顧慮し研究する必要がある。

古淨瑠璃

茲に於て近松と古淨瑠璃との關係は、詩材の上に於ては頗る主要な研究問題となるのである。既に述べたやうに、古淨瑠璃はその全盛時代に於ては正本の出版も非常に多數に上り、随つてその取材の範圍も殆んど我が國の史譚・説話の大部分を網羅した姿であつた。自然この跡を承けて出た近松が、詩材を過去に求めた時代物を作る場合には、どうしても一應これ等多數の古淨瑠璃を顧慮しないわけには行かなかつたであらう。その結果、時としては改作・翻案といふ事が行はれたのは當然の事である。今日に於ては古淨瑠璃の正本は湮滅・散逸したものが多く、自然この兩者の比較を完全に行ふことは不可能の状態にあるが、それでも次に舉げる僅かの例證によつても、如何に古淨瑠璃が近松の作に關係が深いかが分るであらう。例へば改作物としては『忠臣身替物語』は『公平法問評』(寛文三年、上、總縁正信正本)を、『十二段』は例の『十二段草子』の系統を引いてゐるが、近くは加賀掾の『源氏十二段天狗内裏』(延寶五年)を、『大掛物十幅一對』は『賴義北國落』(井上播磨、寛文十一年刊)を、『善光寺御堂供養』は山本土佐掾の『善光寺』(延寶六年)を、『酒吞童子枕言葉』は古淨瑠璃の『酒吞童子』(延寶四年)を、『傾城島原蛙合戦』は古淨瑠璃『天草

四郎島原物語（寛文六、年刊）を、『國性爺合戰』は錦文流の作『國仙野手柄日記』（信濃掾正本、元祿十三年末頃の作）を本として之を近松一流の手腕を以て改作したものである。また正本を見ないから斷言は出来ないが、『佐々木先陣』は井上播磨の『佐々木藤戸先陣』に、『聖德太子繪傳記』は同じく井上播磨の『聖德太子御傳記』（延寶九、年刊）に、『鎌田兵衛名所盃』は古淨瑠璃『かまだ』（寛文七、年刊）に、『根元曾我』は井上播磨の『根元曾我物語』に必ずや深い關係を有するであらう。また『今川了俊』は井上播磨の『今川物語』（寛文七、年刊）を、『傾城吉岡染』は松本治太夫の『石川五右衛門』を、『天神記』は加賀掾の『虎の巻』を、それぞれ詩材として、更に色々の脚色を加へて作つたもので、矢張り淺からぬ關係を有つてゐる。

以上の例によつても、近松の作と古淨瑠璃とは、その題材上に於ては頗る密接な關係を有することはほぼ推測出来るであらう。近松の藝術は、固より彼の天分と多年の修養と經驗との所産であるが、詩材に關して見れば、その時代物は古淨瑠璃を踏み臺として、それに色々の古典や歌謠や巷説を參取して集大成したものである。斯の如く近松の作、殊に時代物には古淨瑠璃の改作・翻案乃至は題材をこれに求めたものが甚だ多いのであるが、彼がこの場合に如何に之を取扱つたか、即ち彼の藝術として如何に劇化したかについては、最も重大な問題であるが、

これは後に論述しようとする近松の作の形式論・内容論に及んで、自然に判明する點も多からう。それ故、今は一言するに止めて置く。

この兩者の關係は、近松自身の初期の作、即ち未だ古淨瑠璃の域を脱せずして、他の古淨瑠璃と殆んど同列に置かれる程度の作と、これを後年に於て改作したものとを取つて比較して見るのも一つの簡便な方法であらう。例へば『花山院后諍』と『弘徽殿鶉羽產家』、『瀧口横笛』と『娥歌加留多』乃至は『いろは物語』と『嵯峨天皇甘露雨』等の比較によつて、最も端的にその改作の程度、劇化の相違などを知ることが出来るであらう。若し是等の諸作を相互に比較して見れば、前者が筋を主とする物語であるに對して、後者は場面を寫すを専らとした描寫であるのに先づ氣が附くであらう。そしてその作の量が每篇後者が前者の三倍乃至四倍になつてゐること、同じ五段でも場面の非常に多いこと、而してそれがまた非常に技巧的となり、挿話からまた挿話の花が咲き、陰謀・虐殺・身代り・愁歎・世話場、その他の種々の型が趣向を凝らしてゐること、文章だけでも、前者が古典的で物語風の型に入つて居て平板な敘事文脈で頗る稚拙なるに對して、後者が豊麗・雄渾・絢爛にして縦横無碍であつて、而も非常に韻律的であり、立體的であるといふ相違は言ふまでもなく、人物も當代化し場面も當代化して居るのに

氣がつくであらう。自然問題は轉じて、近松の時代物の當代化について考究する必要が起つて来る。

歌舞伎

これは固より時代の好尚に伴はせんが爲に作者の作風が變化した結果であるが、その原因としては歌舞伎の影響を見遁してはならない。この點は未だ殆んど具體的には研究されて居ないといつてよいが、之は今後の重大なる研究題目であると思ふ。歌舞伎との關係については、私の見るところでは少くとも、

- (1) 時代物の元祿化は近松の創案もあるが、物によつては先づ歌舞伎之が先鞭をつけ、淨瑠璃之に倣つたこと〔百合若〕の秀景と松が枝、『雪女五枚羽子板』の藤内太郎。嵐三右衛門の丹前六方等)。
- (2) 世話物の出現は、先づ時代相を寫した歌舞伎の氣運に動かされたること(夕霧名殘の正月、丹波興作、傾城佛の原、千日寺心中、大經師昔曆、その他の脚本)。

- (3) 時代物中にも世話場を設けたり、また濡事・傾城買などを仕組んだのは、歌舞伎の脚色を模倣したこと。

- (4) 當代の歌舞伎の名優の舞臺上の面影を人形化したこと〔姫山姥〕の荻野屋の八重桐と荻野八重桐、『夕霧阿波の鳴渡』の伊左衛門と藤十郎。『百合若大臣野守鏡』の悪文次秀景の駕舁と藤十郎のそれ。

藤内太郎と嵐三右衛門。和藤内と團十郎。

(5) 歌舞伎の題材を取つたこと(興作、鞘當、反魂香、佛の原と『天鼓』。『傾城石山寺』(寶永四年、京龜屋座)、

と『津國女夫池』——冷泉文治兵衛の告白は樋口勘助の懺悔を粉本、又酒造之進清瀧猫の戀を羨むは『今源氏六十帖』(元祿元年、都萬太夫座の猫の所作)。

以上の諸項に互つて相當に深い關係を有するものと見られると思ふ。而して舞臺藝術として、また元祿の世相の反映された藝術としては、當代に於ては歌舞伎の方が操よりもずつと進んで居たので、操は歌舞伎からその恩恵を受けたのである。而してこの兩者の橋渡しをしたのが、實に當時劇壇の作者として霸王であつた近松その人であつた。伊原青々園氏も、『其の左手を操に、其の右手を歌舞伎に延ばせると同時に又、彼等をして兩々互に相握手せしめ、自ら其の中央交換手として兩者の間に題目及び脚色の融通を實行せるなりき』(日本演劇史)と述べて居るが、彼の作者としての位置は、この戲曲史上の大問題を取扱ふには最も適して居たのである。それ故、彼は後半期の圓熟時代に淨瑠璃を作るに當つて、その構想、脚色、人物の働かせ方、場面の描き方などに於て、前半期の歌舞伎脚本の作者としての修練と經驗を利用し活用して、元祿時代の民衆藝術としての人形劇を大成し、之をその後繼者に殘したのである。而して彼の衣鉢を繼

いだ作者等は、更にこの近松が圓熟時代に盛んに行つたこの人形劇の歌舞伎化といふ技巧的方面に於て、その極致を示した諸作を出し、今度は逆に歌舞伎に向つて長くその題材を供養する事となつた。これによつて行詰つた歌舞伎は、新材料を得て非常に榮える一原因をなしたが、その資材を供給した操は、もはや展開の途を失ひ、行詰つて了ふ事になるのである。

(ロ) 世話物の詩材

次に、近松の世話物の題材について一瞥を與へようと思ふ。作品の藝術的價值に於ては時代物よりは勝れて居るといはれるが、その題材は却つて簡單である。即ちその題材となつたものは、多くは今日の社會記事程度の出來事であつた。而してその中へ出て來る人物は、時代物のやうな歴史的に著明な理想的の英雄・豪傑・忠臣・勇士、又は惡逆無道の、國を簞ひ天下を覆へさうと企てるといふやうな者ではなくて、見物人と同時代の同じ階級の連中、見知り越しの手合で、極めて平凡な、弱い、缺陷の多い人々である。その中で、金と酒と肉とに最も溺れ易い血の氣の多い青年が、その誘惑にかかつて本能的の欲求のまゝに突進しようとしても、そこには世間の義理の柵もある。思ふがままに金も續かない。又は妨害者もあるといふわけで、結局、生活の破滅を招き、甚しきは未來に望をかけて現實生活を否定するといふやうなことになる。

る。かういふ事柄に作者のいはゆる虚實皮膜といふ一種の理想主義の作劇態度による劇化が行はれて、作り出されたのが世話物である。

今、近松の世話物廿四篇について見るに、いづれも男女の情事に關するものといへる。その中で、『鎗の權三重帷子』と『堀川波鼓』の姦通曲及び『丹波與作』を除いては、すべて平民社會の出來事であつて、殊に大阪の町人や遊女に關したものが多し。而して作の主要人物として遊女の出るものが十三篇に及ぶ。

(1)『曾根崎心中』のお初、(2)『心中二枚繪草紙』のお島、(3)『心中重井筒』のおふさ、(4)『丹波與作』の小萬、(5)『淀鯉出世瀧徳』の吾妻、(6)『心中又は氷の朝日』の小かん、(7)『冥途の飛脚』の梅川、(8)『夕霧阿波鳴渡』の夕霧、(9)『長町女腹切』のお花、(10)『生玉心中』のさが、(11)『壽の門松』の吾妻、(12)『博多小女郎浪枕』の小女郎、(13)『心中天の網島』の小春。

次に結末が心中に終る所謂心中物が十篇であつて、このうち遊女との心中が六篇で、地女との心中が二篇、女夫心中を材としたものが二篇である。圖示すると次のやうになる。

心中物

遊女との心中

曾根崎心中、心中重井筒、心中二枚繪草紙、氷の朝日、生玉心中、天の網島

地女との心中

今宮の心中
心中萬年草

女夫心中

卯月の紅葉、卯月の潤色
心中宵庚申

また非心中物の中で、その主要人物が遊女に惑溺して悲劇に終るものに、爲替金の封印を切つて召捕へられる『冥途の飛脚』があり、海賊の仲間入を強ひられて悲惨な最後をとげる『博多小女郎浪枕』があり、刀の中味をすりかへて叔母に自害をさせる『長町女腹切』があり、勘當されて金に窮した擧句、親切な人妻を虐殺する『女殺油地獄』がある。

さらに、結末は悲劇には終らないが、遊女に關係した爲に波瀾を起して大葛藤を生むものに、千三百石取の侍が馬方とまでなり下り、我が子と知らずに盗みをさせる『丹波興作』があり、大富豪が關所を仰付けられる『淀鯉』があり、また、莫大な負債を持つたまま勘當されて落魄する事件を仕組んだ『夕霧阿波鳴渡』や監禁されて發狂する仕組の『壽の門松』などがある。ところでこの『丹波興作』以下の作品は、大抵古い巷説に基づいて劇化されたもので、いづれも結末は目出度しに終つて居るのも、一つの共通の様式であるのは注目すべきである。その

他、姦通悲劇あり、家庭悲劇としての女夫心中ありといふやうなわけで、當代平民生活の社會相としては相當に種々の方面が描かれて居るといつてよい。

扱て如上の世話物廿四篇の題材を通覽するに、大體これを二つに分けて見る事が出来る。一つはその當時起つた新しい事件を取扱つたものであり、他は古き巷説によつたものである。而して後者としては、『薩摩歌』、『丹波興作』、『五十年忌歌念佛』、『夕霧阿波鳴渡』、『大經師昔曆』、『槍の權三重帷子』、『壽の門松』の七篇を數ふべく、他の十七篇は前者に屬する。この古き巷説に據つたものには事實を仕組んだものもあるが、中には當時流行の俗謠を材として、これにその當時の出來事を附託したものや、又は歌舞伎種のものもある。例へば『薩摩歌』、『五十年忌歌念佛』及び『大經師昔曆』は共にその作の主人公は既に西鶴の『好色五人女』の材題ともなつて居て有名であるが、この中で『大經師昔曆』のおさん茂兵衛の事件は天和三年の出來事であり、お夏清十郎とおまん源五兵衛の事件は寛文年間の古い事柄であると傳へられる。

お夏清十郎（『實事譚』には寛文二年、『中興世話早見』には萬治三年）

おまん源五兵衛（『傳奇作書後書』には寛文三年）

いづれも世に持囃された名高い巷説であつて、三者共に當代の俗謠にもうたはれ、清十郎は

寛文七年の奴俳諧の題目となり、靈元天皇の御詠の題にもつてゐる。

『落葉集』五、小豆庄兵衛作『おさん茂兵衛』（都音頭）

同、四、源五兵衛踊（踊歌）

歌祭文にも綴られて次の如きものがあり、

大經師おさん哥祭文

おなつ清十郎浮名笠

又は芝居にも演ぜられた。

『好色五人女』のお夏の條の終に「……その頃は上方狂言になし、遠國村々里々迄二人が名を流しける」と書いてゐる。

『大經師昔曆』は正徳五年春大阪嵐三十郎座にて、坂東彦三郎の茂兵衛、嵐三十郎四郎のおさん、嵐三十郎のおさん父、大島道右衛門の助七、村上義右衛門の以春等で演ぜられた。

かくして、世にうたはれ演ぜられて有名であつたものを取つて材題としたのである。次に姦通曲の中で最も名高い『槍の權三重帷子』は、享保二年七月十七日夜五つ頃大阪高麗橋の上で行はれた雲州松平出羽守家中の女敵討事件（月堂見聞集二）を取り、これに當時流行唄として唄はれた

『槍の權三』(落葉集五、槍權三、男をどり)

に假託して時代を古くし、「槍の權三が古身の槍、疵も古疵咄も古し、歌も昔の古歌なれど」と結んで一篇を作り上げて居る。尤も、近松はこの事件を一夜漬にして、『好色橋辨慶』と題して事件直後に竹本座の看板に掲げたが、故あつて興行に至らずして一旦



丁初「子帷重三權の鑑」

撤回した(『女敵高麗(茶碗)の序』)が、これと競争的に筆

を執つた吾妻三八の歌舞伎芝居は、彼が片岡仁左衛門と相座本でつた新地櫻町北の相座本であつた歌舞伎芝居で演じて大當りであつたと『役者三幅對』(享保三年正月)に出て居るから、歌舞伎の方が先鞭をつけたのであつた。それと共に見遁し得ないのは、享保二年七月廿一日の日附の序文のある『女敵高

麗茶碗』が刊行され、また『雲州松江の鱧』(享保二年作)

(作者未詳)

及びこの作の影響を認められる享保三

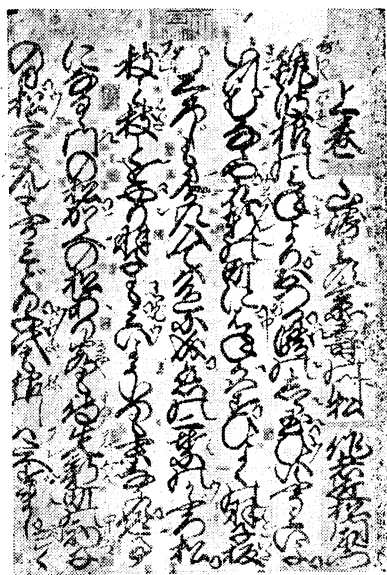
年の序文ある『亂脛三本槍』(西澤一風)

等の如き同材題の浮世草子で、本曲よりは、先に又は並行

的に作られた作もあるが、近松は是等の浮世草子に直接據つた痕跡は見出し得られずして、『月

堂見聞集』の享保二年七月十七日の條の記事を本として、上記の俗謠にヒントを得て、虚實皮膜の態度で一篇を作り上げたものの如くに思はれる。

また『丹波與作』はどうであるかといふに、これ亦古い巷説で知られたもので、俗謠にも夙に小室節として「與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀さし」(『山家鳥蟲』「歌」伊馬)とうたはれ更に『與作踊』、『馬子踊』(『松の落葉』「葉」四)などとして唄はれた。また一方では、早く歌舞伎に仕組まれたもので、延寶五年十一月初代嵐三右衛門が、京都北側の芝居で『丹波與作』を演じて、その籠抜けのやつしが大當りであつたと傳へられ、降つて元祿三年二



丁初「松門の壽衛兵次與崎山」

の替りには、京都村山平右衛門座で富永平兵衛作の『丹波與作手網帶』が演じられ(丹波の國、橋立主膳のお家騒動に仕組む)、また江戸でも、元祿には半太夫の操座で『丹波與作』が演じられ、浄瑠璃でも『善光寺與作』といふ古浄瑠璃があつた。これ等の諸作を直接間接藍本として、こ

れに關の小萬の巷説を取合せ、與作の俗謠を巧に按配して作つたのが近松の『待夜の小屋節』であるといへる。

さらに『壽の門松』の實説については『落標』と『傳奇作書』とは違つた説を立てて居るが、要するに當時流行の『山崎與次兵衛踊』(『松の落葉』四)といふ俗踊に淀屋辰五郎の吾妻身請の事件(一千兩で身請、元正間記)を附會し、更に梶久狂亂を仕組んだ『梶久末松山』を藍本として作り上げたと思つて差支なからうと思ふ(『近世演劇考説』近松門左衛門參照)。

最後に『夕霧阿波鳴渡』は、芝居で有名な『夕霧名残正月』を題材として、夕霧の三十年目に坂田藤十郎の三回忌を兼ねて追善の意味をこめて筆を執り、そして藤十郎一代の當り藝であつた伊左衛門の舞臺姿を作中に髣髴せしめようと企てたものであらうと考へられる(『近世演劇考説』夕霧劇の開展)。

世話物廿四篇中、以上七篇の如く古く著名な巷説や俗謠や、又は歌舞伎などを材題としたものに對して、新しき當面の名高い出來事を詩材として作つた十七篇は、大抵その原據となつた事件があつてから後、まだその餘蘊がさめない間にこれを劇化して上演しようと努めたものが多い。浮世草子や歌舞伎ほどに一夜漬に行かない性質の人形劇であるだけに、作者も作曲者も

演出者も努力と苦心は大抵ではなかつたが、それだけまた興行價值は高かつたわけである。而してその最も迅速であつたのは心中物の嚆矢といはれる『曾根崎心中』であらう。二人の情死の日時については二説あるが、今比較的信すべき元祿十六年四月七日（攝陽隨筆、二人の墓の碑面、作中の日附等）の事として計算すると、丁度その事件のあつた一ヶ月後に初日を出した事となり、若し『心中大鑑』や『外題年鑑』の説の如く、二人の情死を四月廿三日とすれば僅に二週間目の開演といふ事になる。あれほど洗鍊された文章の淨瑠璃を書上げた上に、更にこれに別な人が作曲して、その上で人形劇に仕上げて勾欄にかけるまでの複雑な手續を思ふと、それが一ヶ月目であるとしても尙實に神速を極めたものといはざるを得ない。『曾根崎心中』に次いで、享保三年閏十月十九日に拔買の罪人六十四人が大阪で處罰された事件を、卅一日目の十一月廿二日（享保五年十月十四日）で上演した『博多小女郎浪枕』も早い方であり、『心中天の網島』は五十二日目（十二月六日上場）で上場して居るが、是等はいづれも早い例であり、『冥途の飛脚』や『堀川波鼓』などは三ヶ月乃至八ヶ月目であるが、かうなれば、作者は際物以外に更に別に作意の上に工夫をこらしてその埋合せとして居り、時には『心中宵庚申』などのやうに一周忌を當込んだり、又は『長町女腹切』のやうに、古い巷説に新しい事件を取合せるといふ趣向を立てたりして居る。

要するに世話物に於ては先に述べたやうに材題論としては比較的簡單であるが、それでも尙不明なもの乃至疑問を含むものもあつて、尙今後の研究に俟つべき點は尠くないが、更にこの材題を如何に劇化したかを研究するのが尙一段と大切な點である、これは後に至つて更に明かにするであらう。

四 近松戲曲の形式

元祿時代が我が國近世の文藝史上に於ける位置については今更言ふ迄もないことであるが、この元祿時代の演劇、殊にその文學的方面を主としての戲曲として見れば、義太夫劇が最も緊要にして最高の價值を有するものたるに於ては、何人も異存のないことであらう。而してこの元祿期の義太夫劇の詞章たる元祿期の淨瑠璃戲曲は、實に近松の作品によつて代表されるといつて差支ない。而して既に述べた如く、その詩材に於てもあらゆる點に互つて、集大成を遂げてこれがやがて後繼者の典據となつたのであるが、更にその作品の形式及び内容、即ちその作の表現・趣向・脚色・結構・人物の取扱方・その思想等について考察してこれを歴史的に批判する事となれば、いよいよその價值の大なるを認めざるを得ないと思ふ。